

神座十二前前各六

名香二兩○中 黍稷飯各一斗二升○下

〔延喜式大學〕凡籩實堅鹽五顆○中 籩籩實稷飯用米六合、黍稻梁飯、各用米七合、

釋奠十一座

簋二稷飯、籩二、稻飯、黍飯、梁飯、

〔延喜式雜式〕諸國釋奠式

簋四座別二、外方内圓謂之簋、其實黍飯、稷飯、 簋四座別二、外圓内方謂之簋、其實稻飯、梁飯、

〔倭訓栞中編一〕あはいひ 粟飯也、又脫粟飯といふは黒米飯をいふ、太平記に粟飯原の氏みゆ、

〔徳用食鏡〕粟飯焚様

粟をよくつき○註 しばらくして、飯焚前、あらひ箱にうちあげ、水をたらしおき、あはには石あるものに石なけれど、ゆりて、いしをとるべし、扱飯を水かげんするには、粟だけの水を餘分に入焚てふきあがりたるとき、右粟を入、かきませることなく、入たる粟の高低をしやくしにてならし、はやくふたをし、此とき火は減す 焚あげ、しばらくむらしてかきませ、飯櫃に移しとり食すべし、又あらふことなく、ふきあがる時はやく米のうへに入焚てもよろし、

〔釋日本紀七述義〕備後國風土記曰、疫隅國社昔北海坐志 武塔神、南海神之女子乎 與波比爾坐爾、日暮彼所蘇民將來二人在倭、兄蘇民將來甚貧窮、弟將來富饒、屋倉一百在倭、爰塔神借宿處、惜而不借、兄蘇民將來借奉、即以粟柄爲座、以粟飯等饗奉、

〔太平記五〕大塔宮熊野落事

大塔宮二品親王○護ハ、○中 般若寺ヲ御出在テ、熊野ノ方ヘゾ落サセ給ケル○中 路ノ程十三日ニ十津河ヘゾ著セ給ヒケル、宮ヲバトアル辻堂ノ内ニ奉置テ、御供ノ人々ハ在家ニ行テ、熊野參

粟飯